

「利賀ダム建設事業の検証に係る検討報告書（素案）」

に対する関係住民からの意見を聴く場

議 事 録

日時：平成28年6月18日（土） 13：30～14：20

場所：富山県高岡文化ホール3階第2会議室

【発表番号1番】

私は小矢部市に住んでおります●●と申します。特に土木技術の専門家というわけではございませんが、私見を述べさせていただきたいと思ひまして、本日ここに参りました。よろしくお願ひします。

座ってお話しさせていただきます。

さて、この事業は、これまで何度か発生しました庄川流域での洪水被害等を踏まえ、今後の被害発生を少しでも減らしてほしいという住民の願ひを受けて始まったものと承知いたしております。

その願ひに応えるために、どんな方策があるのか、慎重に検討する必要があります。

洪水被害を防ぐ方策としては、私は次の3つがあると考えております。

第1は河道対策でございます。河床の掘削や堤防かさ上げなどの方法で可能な流水量を増やす、あるいは数あるダムの流量調節機能をフル活用して流量のピークをならず、こういったことも有効であると考えております。

そして第2番目は流域対策です。ご承知のように、庄川には全国に誇れる霞堤がございます。庄川本川からあふれ出る水を受けとめ、そして水位が下がった時点では排水するということで、重要な役割を果たしております。

また、洪水が起こった際に下流、すなわち小矢部川方向へ流れる水を処理するために、現在、ご承知のように、国営で庄川左岸の排水を改良する事業が行われております。数々の調整池がつけられているのも皆様目にしておられることと思ひます。これらはいずれも被害を最小限に食いとめるための努力として行われているわけでございます。

この2つを行っても不安が残るようであれば、第3の方策としてダム建設があると私は考えます。

今回の利賀ダム建設事業に着手されるに当たり、今申し上げた2つの方策の可否がしっかり検討されたのかどうか。私に言わせますと、この3つを一遍に並べてどれにするかではなく、第1の河道対策をしっかり行い、そして流域対策もした上で、さらに不安であればダム建設にかかるというのが私としての考えでございます。

報告書の素案を拝見しますと、さまざまな理由が述べてございますが、例えばダム保有者との調整などについては、いろんな理由で困難とか、そういった結論が随所に見られるように思ひます。あるいは堤防をかさ上げしようとしても、あるいは改良しようとしても、住宅地が堤防に迫っているということなども挙がっているわけで、困難と言えば困難ですが、じゃ、不可能なのか

といいますと、私は単純にそのようには読めなかったわけでございます。

そして何よりも私が強く申し上げたいのは、利賀ダム建設に係る危険性についての認識が十分かどうかという点です。

ご承知のように、建設予定地は右岸側に地すべり指定地を抱えており、その現状と危険性を十分に調査し結論を出すべきだと思います。

現地では、富山県による地すべり防止工事が営々と続けられていることは多くの皆様をご存じのとおりでございます。

現地の地質調査はどの程度やられたのでしょうか。ボーリングや横穴孔調査による徹底した事前調査は欠かせないと考えます。

一旦湛水いたしますと、近接斜面の地下水位が上がり、上方に向けて浮力が働くこととなります。それによって地すべりが発生するわけでございますが、特に大豆谷地区などでは地すべり面も長く、大変心配なところであります。

また、水没する予定地にも既にアンカー工が施されているところがありまして、これらが浮力の増加を受けて崩落するのではないかと、そういったことも十分考えられます。

全国的に大変有名な例として、奈良県川上村で建設されました大滝ダム、これが大きな反対を押し切って強行されましたが、湛水試験を実施した段階で大規模な地すべりが発生をいたしました。ダム湖に面する白屋地区では家や地面が傾き、37戸全てが移転するということになり、その費用は実に430億円かかったと聞いております。この大滝ダムは、ダム建設全体の費用も当初は230億円と言われておりましたが、何と現在では3,640億円にまで膨らんでいると聞いております。

今回の利賀ダムの建設に当たっては、湛水試験期間は1年とされているようですが、もし建設するとしてもこれでは短いのではないかと思います。漏水対策などは、1年間で結論が出るかあるいは対応できるかというのは非常に不安なところがございますので、さらに徹底して行うことが望まれます。

そもそも、今回の事業、主に庄川下流域における洪水被害を少しでも少なくするためにということが各種の資料から見えてくるわけでございますが、どうして庄川支流の利賀川に白羽の矢を立てる結果がベターなのかということが、どうしてもいま一つのみ定めません。

利賀川の流域面積は、庄川のそれに比べて10分の1もありません。最高流量は毎秒770トンと想定されている数字も見えますが、そのうち500トンの新設ダムでカットするとされているわけですが、果たしてこれほどの流量が本当に流れるのかということです。流域面積に左右されますし、南北に長い形状でありますので、蛇行しているわけではなくて直線ではぼ北上している川でございます。

したがって、大雨が降っても、じゃ、南北に長い範囲で大雨が降るといことになりまして、関東地方のこの前の豪雨のような状態でもない限りは、湖面の利賀川沿岸全てに雨が降るといことはなかなか考えにくいわけでありまして。

したがって、洪水流量のピークは長い時間にわたって、奥に降った雨がダムまで来るには相当

時間がかかるわけです。だから、その沿岸一帯の雨が一気にダムへ押し寄せるということは理論上あり得ないわけです。

したがって、ダムによる洪水のピークカット効果はそんなに大きくはないと考えるのが妥当ではないでしょうか。

逆に、ダムで一旦ためて遅らせ放流するほうが、下流の流量ピークを大きなものにする危険があると私は考えます。

また、今回のダムは、150年に一度の洪水に対応できる治水安全度を確保する目的で進めると書いてあるところがございしますが、これは一級河川の中の、いわゆるB級河川での整備目標に匹敵すると言う方がいます。それほどの流量がある重要河川であるとは、なかなか言えないと思います。150年というのは相当な年月だと思います。

このダム建設によりまして、下流では洪水時の水位を一定程度下げることがうたわれていますが、それは堤防の現在求められている、いわゆる余裕高に比して目を見張らせるほどの大きな下げ効果だとは私は思いません。

また、150年経過しますと土砂の堆積も膨大な量となりまして、上流の県営ダムなどにも問題が徐々に出てきておりますように、洪水調節機能が低下していくことは想像にかたくないと考えております。

そもそも洪水被害ゼロというのは可能なのでしょうか。もし本当にゼロにできるとすれば、永遠にダムをどんどんつくり続け、堤防をどんどんどんどん高くしない限りは無理なわけでございます。

翻って目を現地に向けますと、庄川地内では立派な二線堤を従えた松川除けが、1,500メートル余りにわたって現存しております。牛棗水制や玉石の備えもされています。また中流域には、典型的な霞堤が悠然と並んでおるわけでございます。

庄川本流には、御母衣ダムから庄川合口ダムまでの多くのダム群が一体的に運用されており、これがさらに洪水の危険があるときには力を発揮するように、緊密な連携を深めることも重要かと思えます。庄川下流沿岸に近接する地内に住んでおられる皆さんは、早急な対策を望んでおられると思えます。

最近、先ほども申し上げたように、関東地方で起きました洪水被害に見られるように、ダムがあるから安心などとは言えないのではないのでしょうか。むしろ、堤防などの河道対策が喫緊の課題であるとの認識が住民の間に強まったのではないのでしょうか。

川幅を広げるなどの工事を行うことは、未来永劫にわたって有効な対策であると言えます。川幅を広げることによって起きる被害はないと思えます。

庄川水系では、河川整備基本方針に基づいて河川整備計画が策定され推進されていると理解しております。

ただし、今回の中にも、予算の状況等により変動する可能性があるという文言が随所に見受けられます。これはなかなか関係の方の本音が表明されていて興味深いなと思って拝見しているわけ

でございますが、15年近くはかかるというダム建設、そして、先ほど申し上げた幾つかの不安が
つきまとい、その効果にも若干の疑問符をつけざるを得ない利賀ダム建設に執着するのではなく
て、王道であります河道対策、そして流域対策を組み合わせ、早急に住民の不安を払拭する事
業を展開されるよう願って、私の意見陳述を終わります。

貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。